■ Culture

石ノ森章太郎「新装版マンガ日本の歴史26　大正デモクラシーと政党政治の没落」（中公文庫）©石森プロ　政党政治が展開されるも、やがて軍部が台頭していく時代が描かれる

ゆかりの場所 多く残る

原の出身地、盛岡市内にはゆかりの場所が多く残る。中でも1850年に建てられた生家は、もとは藩主を迎える部屋を備える豪邸だった。明治維新後生活が苦しくなり、取り壊された部分もあるが、今も同じ場所にあり、隣には原敬記念館が立つ。常設展では、近代史の一級史料である原敬日記の複製や、凶刃に倒れた時に着ていたピンクのストライプシャツの複製などを展示している。

生家から約4キロ離れた報恩寺では1917年、戊辰戦争で亡くなった南部藩士を弔う慰霊祭が営まれた。原は「戊辰戦役は政見の異同のみ」との言葉を読んだ。賊軍とされた歴史への決別の思いを込め、勤王、愛国の志は変わらなかったという考えを表した。佐々木学芸員は「原は薩長に敵意を持っていたと思われているが、薩長出身者の政権でも政策が良ければ評価した。感情に流されず、広い視野で物事を評価する見識があった」と話す。

同館では来年1月13日まで、新資料を紹介する「新収蔵資料展」を開いている。2019～23年度に同館が収集した書簡や書、写真など79点が並ぶ。

原敬の生家

＊ 歴史研究が深まるにつれて日本史のトピックは見直されています。「日本史アップデート」では、研究成果を反映した最新説を、広く知られた従来説と比較しながら紹介します。「世界史アップデート」と隔週で掲載の予定です。